

2021
第2号

2021年 8月発行

あすか通信

ASCA 株式会社 文化財サービス
ASSISTANT SERVICE FOR CULTURAL ASSETS

■本社
〒612-8372
京都府京都市伏見区
北端町 58 番地
TEL : 075-611-5800
http://bunnkazai.co.jp/



沖縄

沖縄の霊柩車『龕』 の修復作業



沖縄では古くから遺体を墓地まで運ぶ際に『龕(ガン)』と呼ばれる木製の輿を使用しており、現代でいうところの霊柩車のような役割を担っていました。八重瀬町が所有する字具志頭くしかみの龕には「嘉陽拾四年己巳十月四日仕立」と墨書で記載されており、嘉陽 14 年(西暦 1809 年)に製作されたことが分かっています。戦前の資料の多くが沖縄戦で消失しているなか、戦火を逃れて今日まで現存している希少なもので



修復作業後



作業前の状況



屋根裏の劣化状況

であり、その貴重さが認められて令和 2 年度に『字具志頭の龕及び付属装具修復事業』として三菱財団文化財保存修復事業(第 2 回)の助成を受けて修復作業が実施されました。

龕は全体に土埃や虫喰・腐食による破損や欠損が見られ劣化が著しい状態で、修復作業は①全体のクリーニング②塗膜の剥落止め③樹脂塗布による強化処理④破損・欠損部分の修復及び補填の工程で実施しており、特に虫喰いが酷かった屋根裏部分は残存する塗膜を和紙で表打ちする処理を全体に施しています。修復された龕は八重瀬町立具志頭歴史民俗資料館で展示中です。



屋根裏の表打ち処理後

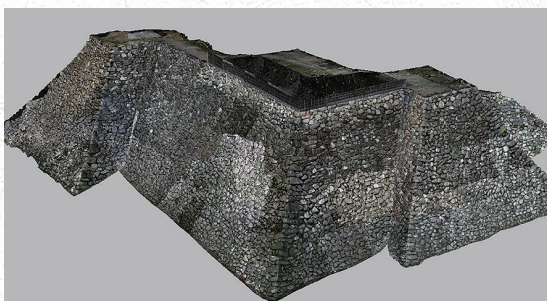
測量

伊勢亀山城 Remastered

～過去の撮影データを最新ソフトウェアで焼き直す～



平成 19 年 4 月に発生した三重県中部地震において、伊勢亀山城多門櫓の城壁の一部が崩落しました。弊社では同年同月に崩落箇所を、平成 20 年 7 月下旬から 8 月上旬にかけては石垣の



伊勢亀山城(2008)

全周囲を写真測量しました。当時、もちろんドローンではなく、1,000 m²にもおよぶ石垣の写真撮影には、長さ 10m の大型ポールや滑車式のカメラ吊り下げ装置を使い、時にはハーネスを身につけて高さ 12m の石垣をよじ登りながらの決死の撮影を行いました。

あれから 10 余年。過去の撮影データを最新の SfM ソフトウェア(Bentley 社 ContextCapture)で再解析したところ、当時の技術では継ぎ接ぎだったテクスチャが改善され、美しい 3D モデルを作成することに成功しました。



伊勢亀山城(2021)



遺物整理

国内最大級の子持勾玉を 3D プリントに



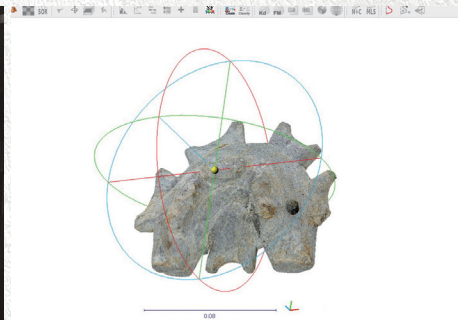
昨年度に香芝市教育委員会より受注した子持勾玉2点の3Dデータ化業務の成果を用いて、3Dプリントを行いました。手前味噌ではありますが、子持勾玉のユニークな造形がよく再現できています。

2点のうち大きい方は、香芝市^{きついい}狐井稲荷古墳から発見された国内最大級の子持勾玉です。実物は長さ13cm、幅10cm、厚さ5.5cm、青みがかった灰色の滑石製で、重さ565gです。一方3Dプリントは樹脂製で234gと、実物の半分の重さになっています。着色して出力できますが、今回は、プラモデルに色を塗るように着色することを想定し、あえて1点を白で出力しました。

樹脂製の精密な3Dプリントは、気軽に手に取れる教材などとしての実用性が期待できます。[3Dデータ出力 協力：復建調査設計株式会社]



3Dモデル撮影風景



子持勾玉3次元モデル(狐井稲荷古墳)



子持勾玉3Dプリント(大・白：狐井稲荷古墳、小・着色：狐井城山古墳)



発掘調査

一ノ井遺跡 発掘調査



令和3年3月から4月にかけて、京都市右京区太秦垣内町に所在する一ノ井遺跡の発掘調査を行いました。調査地はその西側を南北に走る城北街道をはさんで、広隆寺旧境内の東限に隣接しております。広隆寺は飛鳥時代に秦氏によって創建されたと伝えられる寺院ですが、平安時代末期から江戸時代にかけて大きく繁栄しました。実際に、当該期において広隆寺周辺では集落が発展していた事が周辺の発掘調査より明らかになっております。

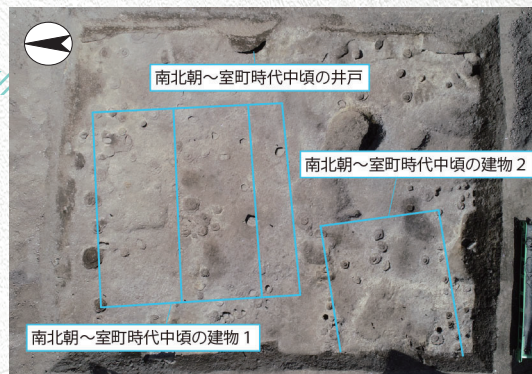
今回の調査では、南北朝から室町時代中頃に属する小型の礎石を伴う柱穴群・井戸・土取り穴、鎌倉時代前半に属する大型掘立柱柱穴群・井戸・土坑など、多数の遺構が検出されました。南北朝から室町時代中頃の柱穴群からは北西軸の掘立柱建物2棟、鎌倉時代前半の柱穴群からは北東軸の柵列2条が復元出来ました。掘立柱建物2棟は城北街道並びに広隆寺旧境内の



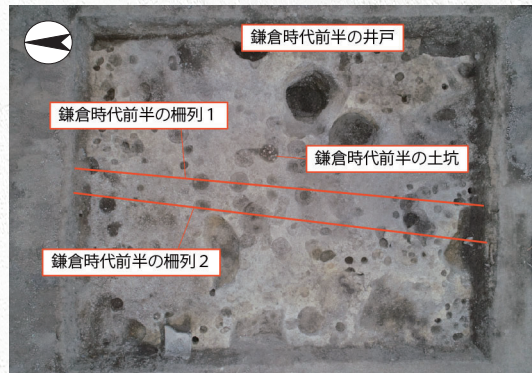
土師器皿一括投棄土坑

軸と平行していることから、広隆寺の門前町的集落の性格を持っていたと想定されます。柵列2条はそれぞれの柱穴が隣接していることから、つくり替えられたものであると考えられます。また、その柵列群の東側には完形の土師器皿が口を上にした状態で多量に出土した土坑が検出されており、祭り事で使用された土師器をまとめて投棄したもの、或いは地鎮的な性格を有する可能性も想定されます。

これらのことから、広隆寺が興隆した中世の時期において、調査地は宅地として活発な土地利用がなされていたことが窺えます。



南北朝～室町中頃垂直写真



鎌倉時代前半垂直写真